

〔論文〕

2歳児クラスのままごと遊びにおける 保育者の応答的関わりの一考察

玉 川 朝 子
Tomoko Tamagawa

千早赤坂福祉会
上本町げんき学園

本研究では、2歳児クラスの保育実践の観察を通し、子どもと保育者のかかわりについて考察するものとする。子どもとの関わりやそのあり方について研究は行われているが、乳児期についての研究はほとんどない。また、ままごと遊びについてもその意義や役割について発達上の研究は行われているが、実践を通したものはまだまだ少ない。平成30年改定された保育所保育指針にも明示されているとおり、保育においては子どもへの応答的な関わりが重要であるとされている。しかし、一方で応答性のバランスについては保育者一人ひとりに委ねられているという問題が挙げられる。子どもと保育者の間で応答的に関わっていると一言で言っても、目には見えにくく、その定義は一括りにはできない現状がある。特に乳児期の関わりについては、子どもに対して保育者が個別に対応しながら関わっていくことが必要とされる。ままごと遊びは、園生活の中でも代表的な遊びとすることができるが、子どもが主体となって遊びが展開されるように配慮が必要である。遊びの中で、子どもの「今」と保育者の「今」が同じ目線でいかに心通わせ合いその中で同じ楽しさを共鳴し合っているかを検討する。その前提として、保育者一人ひとりの子ども理解・子どもの捉え方・働く環境が色濃く反映されていること、言い換えれば子ども理解の深度が考えられた。保育現場において、保育者がままごと遊びをどのようにとらえ、関わりが行われているのかを探る。

キーワード：2歳児クラス、ままごと遊び、保育者の関わり

I. 問題提起・研究目的

1. 保育所保育指針における保育者の応答的な関わりについての検討

保育場面において、子どもへの応答的な関わりが求められることは言うまでもない。平成30年に改定された保育所保育指針には、「応答」に関する記述が多数みられる。また、今回の改定では、「乳児・1歳以上3歳未満児の保育」の重要性が示されていることが分かる。保育所保育指針解説「序章 改訂の方向性」には以下のように示されている。「乳児から2歳児までは、心身の発達の基盤が形成される上で極めて重要な時期である。また、この時期の子どもが、生活や遊びの様々な場面で主体的に周囲の人やものに興味をもち、直接関わっていかうとする姿は、『学びの芽生え』といえるものであり、生涯の学びの出発点にも結び付くものである。こうしたことを踏まえ、3歳未満児の保育の意義をより明確化し、その内容について一層の充実を図った。」¹⁾とある。本研究では園生活の中で、子ども達が主体的に活動をする遊びとして一般的に行われているままごと遊び²⁾に焦点を絞る。

乳児クラスの保育において保育者が子どもの遊びをどう支え、どのように関わっていくかということが極めて重要である。さらに保育者の保育観や専門性が問われ、子どもに対する応答的な関わりはそのまま子どもの遊びに反映されていくだろう。今回の改定で、「第2章 保育の内容」は「乳児保育」と「1歳以上3歳未満」に年齢区分されている。

指針解説第2章 「1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらいおよび内容（1）基本事項」には次のように示されている。

「発声も明瞭になり、語彙も増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるようになる。このように自分であることが増えてくる時期であることから、保育士等は、子どもの生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わる必要がある。」（指針解説p121より）

ここでは保育のねらい、内容が示されているが、遊びの中で子どもの姿を十分に理解した上で、その場に応じた臨機応変な関わりや温かい見守りが必要であるとしている。現場に置き換えてみるならば、保育者の経験や勘

のみで保育を行うだけでなく、子ども理解の深度によって支えられた関わりが必要である。しかし、それはままごと遊びのどのような場面で見られ、子どもにとっての応答的な関わりといえるのかを検討する。

先行研究によると、野澤ら（2016）³⁾は、乳児保育の質に関して、「従来から日本の保育で重視されてきた『子どもに共感し寄り添うこと』の内容を何で育むのかとの関連でより具体的に把握することが必要である。」との指摘だけでなく、「日本においても保育の質に関わる量的研究と質的研究の両方によって、日本ならではの保育の質のあり方を明らかにし、保育の質の保障・向上へと貢献していくことが期待される。」との展望を立てている。乳児保育における保育の質の向上が急務とされていることは事実である。

「応答的な関わり」の前提として気を付けなければいけない点は、どういった基準で場面の考察を行っていくかという点である。言葉を交わすことができれば応答している、子どもの思いをくみ取ろうとしていれば応答しているといった、形に見えるものだけではないだろう。遊びを支えている環境や保育者の遊びの面白さを理解していくことはもちろん重要であるが、子どもが遊んでいる際に感じる「楽しい」と感じる瞬間に、そばにいる保育者がいかに同じ気持ち（楽しさや面白さ）をともに感じ、共有できるかという点が大切ではないかと考える。そういった意味合いも込めながら、保育者が子どもの状況に応じてどのように言葉や身振り・手振りなどの反応を通して応えようとしているかを予備調査②のままごと遊びにおける事例研究を通して分析していく。まずは保育を行っていく上で実際保育者がどのような思いでままごと遊びに関わっているかを次章のアンケート調査から整理していきたい。

2. 2歳児にとってのままごと遊びの位置づけと保育者の関わり

片平ら（2016）は、幼児教育における「ままごと」について「ままごとの模倣のモデルとなるのは身近な大人や年上の子どもである場合が多いが、日常の中でいかに魅力的なモデルと出会うかということも遊びの広がりにかかわってくる」⁴⁾と指摘している。さらに遊びの発展には環境構成や途中の関わり等、保育者の担う部分の大きさを踏まえたうえで、ごっこ遊び⁵⁾の大きな特徴に子どもから出発していることをあげている。子どもから発される遊びの姿がそのまま学びの芽生えとして見られることがままごと遊び⁶⁾の特徴でもあると考えた。

一方で玉置ら（2010）は、3歳から5歳の幼児を対象とし、ごっこ遊びにおいて保育者がどのように関わるべ

きか、質的構造理解が必要であると述べている。第1に「虚構の世界での関わり」、第2に「現実の世界での関わり」、第3に「実況する関わり」である。この実況する関わりが子どもの内的活動⁷⁾に直接的に働きかけるものであり、ごっこ遊びにおける関わり方として有効であると述べている。乳児期であれば、さらにこの内的活動に注目して遊びを支えていく必要があると筆者は考えた。言葉にならない思いをどのようにとらえ、それを保育者が必要に応じて代弁していくか、また子どもがイメージしていることを実際に上手く表現しづらい場面に、保育者が模倣して見せるなど幼児期とは違った配慮が乳児期には必要であると考えた。

中島（2004）は、保育者の応答性について「乳児に情動性とそれとともなう外界の対象への意味づけを生み出すことが分かる」としている。さらに保育者は、子どもの信号に対して敏感であることとともに、信号に対して適切な内容と適切な時間による対応が確実に行われ、その中で子どもとの間に相互性を生み出していくことの重要性を訴えた。確実な相互性のある応答的関わりは、子どもの情動性、志向性を持つ自己の育ちに深く関わることを示唆したのである。保育者の発する音声・身振りに含まれる意図が乳児に共有されることは、この外界の対象への意味づけを生み出すと指摘した。これらを踏まえ、乳児期において大切にされる関わりとして内的活動の理解、その上に支えられて遊びの展開がなされ、保育者の各場面での関わりがその後展開を左右されると考えられた。では、保育者の配慮と一言で言ってもどのような心がけがなされているか。またその中で見られる保育者の関わる際の不安要素はどういったものなのか検討する。

3. 研究の目的

これまでの研究では幼児に対しての関わりを対象としたものが多く、乳児対象の研究は少ない。本研究は、保育者が2歳児クラスの子どもへどのように関わっているか実態を検討する。

さらにままごと遊び中の子どもが行っている外界への働きかけを保育者はどのように意味づけをしながら展開しているか、また支えとなる働きを行っているか一考察を行うものとする。

長谷川ら（2007）⁸⁾は、1、2歳児のままごとのきっかけとして、「一人で遊び始める」と「保育者の言葉掛けによって始まる」この2つを指摘している。遊びが始まるきっかけだけではなく、その後の展開までを予想したとき、保育者が子どもに対し、どのような言葉を掛けただかという点は重要であるが、現場の保育者は言葉の有

無のみではない、他の関わりも多く意識をしているのではないかと考えた。そこで、本研究では予備調査としてアンケート調査を行い、ままごと遊び場面での2年目・7年目の保育士の関わりをあげ、どのような実態がみられるかを考察するものとする。

II. 方法と仮説

1. 予備調査①（アンケート調査）

（1）調査対象者

予備調査として、大阪市内の私立保育園に勤務する保育者のうち、2歳児クラスの経験者である保育者108名へアンケート調査を行う。勤続年数を4つに区分したうち、15年以上が34名、10～14年が18名、5～9年が34名、1～4年が22名となった。

（2）調査期間

2017年9月1日から9月末日まで

（3）調査内容与方法

質問紙調査を郵送にて実施した。配布数は300枚、有効回答数108枚、回答率36%であった。質問紙調査名は「2歳児の自由遊びにおける保育者の働きかけに関するアンケート」、である。それぞれの各項目に対する意識の度合いを「そう思う」「少し思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「思わない」の5択形式で回答を集計し、集計結果及び項目間の比較により、意識の傾向をとらえた。また「自由遊びの中でも特にままごと遊びの際に心がけていること、働きかけについて」を自由記述で質問した。その自由記述の回答を表1に示した。

（4）倫理的配慮

調査対象者に対しては、書面により、インフォームド・コンセントを目的とした説明文を調査票の冒頭に入れ、調査協力に対する同意を得ることを必須とした。質問紙調査への回答は任意であること、研究の目的以外に

調査データを使用しないことなどを前提として、調査協力を依頼することで、倫理的な配慮を行った。

（5）調査結果と考察

①アンケート結果（5択形式）

ままごと遊びの際に保育者がどのような配慮・心がけを行って子どもと関わっているかというアンケート調査の集計結果が、表1～表6である。（表中に表記している保育歴A～Dのそれぞれの経験年数の内訳は、以下のとおりである。A群→1～4年目、B群→5～9年目、C群→10～14年目、D群→15年目以上）集計後、それぞれの結果について、考察を行った。

表1（ままごと遊びをしている際）子どもと一緒に関わって遊んでいるかという質問事項では、A～D群のどの経験年数でも「そう思う」の回答が高く合計71.3%であり、「思わない」という回答は0%と全くなかった。大半の保育者が、子どもと一緒に関わって遊んでいると意識していることが分かる。しかし、B群においては「どちらともいえない」（8.8%）、「あまり思わない」（2.9%）との回答率が11.7%であった。一緒に関わって遊ぼうとしている意識は、高いものの5年目から9年目という、中堅の保育者になってくると一緒に関わって遊ぼうという意識になんらかの弊害を及ぼしたり、迷いが生じているのではないかと考えられた。さらにA群では、「そう思う」、「少し思う」という回答のみで、「どちらともいえない」「あまり思わない」という回答が0%と全くなかった。ここから、4年目までは自由遊びの際、目の前の子どもに対して「一緒に遊ぶ」という意識が非常に高いことが分かった。

表2「ままごと遊びの際に応答的な言葉がけを行っている」という質問項目では、「そう思う」の回答が全体の74.1%を占めており、「あまり思わない」「思わない」の回答は0%であった。特にC群では、「そう思う」という回答が100%であった。一方、A群・B群の9年目までの保育者は、「少し思う」（A 45.5%、B 35.3%）という割合も高く、特にA群では、「そう思う」（54.5%）

表1 （ままごと遊びをしている際）子どもと一緒に関わって遊んでいるか

		一緒に関わって遊んでいる					合計
		そう思う	少し思う	どちらともいえない	あまり思わない	思わない	
保育歴	A	15 (68.2%)	7 (31.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	22 (100%)
	B	24 (70.6%)	6 (17.6%)	3 (8.8%)	1 (2.9%)	0 (0.0%)	34 (100%)
	C	14 (77.8%)	3 (16.7%)	1 (5.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	18 (100%)
	D	24 (70.6%)	9 (26.5%)	1 (2.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	34 (100%)
合計		77 (71.3%)	25 (23.1%)	5 (4.7%)	1 (0.9%)	0 (0.0%)	108 (100%)

表2 (ままごと遊びをしている際) 応答的な言葉がけを行っているか

		応答的な言葉がけを行っているか					合計
		そう思う	少し思う	どちらともいえない	あまり思わない	思わない	
保育歴	A	12 (54.5%)	10 (45.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	22 (100%)
	B	22 (64.7%)	12 (35.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	34 (100%)
	C	18 (100%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	18 (100%)
	D	28 (82.4%)	5 (14.7%)	1 (2.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	34 (100%)
合計		80 (74.1%)	27 (25.0%)	1 (0.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	108 (100%)

表3 (ままごと遊びの際) ねらいをもった保育を行っているか

		ねらいをもった保育を行っているか					合計
		そう思う	少し思う	どちらともいえない	あまり思わない	思わない	
保育歴	A	9 (40.9%)	9 (40.9%)	3 (13.6%)	1 (4.5%)	0 (0.0%)	22 (100%)
	B	12 (35.3%)	13 (38.2%)	5 (14.7%)	4 (11.8%)	0 (0.0%)	34 (100%)
	C	11 (61.1%)	5 (27.8%)	1 (5.6%)	0 (0.0%)	1 (5.6%)	18 (100%)
	D	11 (32.4%)	11 (32.4%)	9 (26.5%)	3 (8.8%)	0 (0.0%)	34 (100%)
合計		43 (39.8%)	38 (35.2%)	18 (16.7%)	8 (7.4%)	1 (0.9%)	108 (100%)

表4 (ままごと遊びの際) 話しかけられやすい雰囲気を意識しているか

		話しかけられやすい雰囲気を意識しているか					合計
		そう思う	少し思う	どちらともいえない	あまり思わない	思わない	
保育歴	A	15 (68.1%)	6 (27.2%)	1 (4.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	22 (100%)
	B	19 (55.9%)	10 (29.4%)	5 (14.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	34 (100%)
	C	13 (72.2%)	3 (16.7%)	2 (11.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	18 (100%)
	D	18 (53.0%)	11 (32.4%)	5 (14.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	34 (100%)
合計		65 (60.2%)	30 (27.8%)	13 (12.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	108 (100%)

の回答と9%しか差は見られない。また、D群では、「どちらともいえない」という回答も2.9%出ており、ままごと遊びをしている際に応答的な言葉がけを意識していることが分かったが、それぞれ個人差がある可能性も考えられた。

表3「ままごと遊びの際、ねらいをもった保育を行っているか」という質問項目では、A群は、「そう思う」9人(40.9%)「少し思う」9人(40.9%)という回答率が高く、「思わない」は0%であった。B群は、「そう思う」12人(35.3%)「少し思う」13人(38.2%)と回答率は最も高いが、「どちらともいえない」(14.7%)「あまり思わない」(11.8%)をあわせると、9人(26.5%)。「思わない」は0%であった。C群は、「そう思う」11人(61.1%)「少し思う」5人(27.8%)と経験年数別の中でも最も割合が高かった。D群は、「そう思う」11人(32.4%)の割合が経験年数別の中で最も低く、「どちらともいえない」9人(26.5%)「あまり思わない」3人(8.8%)と、ばらつきが見られた。特にC群では、「思わ

ない」(5.6%)という回答もあった。また、「あまり思わない」(7.4%)「思わない」(0.9%)の全体の回答率では、8.3%であった。ねらいをもった保育をしている意識としては、経験年数が豊富である、いわば主担任としてクラス運営を行っている保育者の方が、意識している人数は比較的少ないことが分かった。しかし、意識が低いということではなく、様々な要因が考えられる。例えば、子どもの主体性を大切にすることがゆえにあえてねらいを立てないという配慮として考え得ることもできる。今回のアンケート調査の結果からは、そこまで読み取ることは出来なかった。

表4「ままごと遊びの際、話しかけられやすい雰囲気を意識しているか」という質問項目から、どの経験年数別のグラフからも、「そう思う」という回答が多く、全体でも60.2%を占めていた。さらにどの群からも「あまり思わない」、「思わない」という回答は0%で全くなかった。B群・D群でも、「そう思う」「少し思う」が多いが、同時に「どちらともいえない」という回答が両群

表5 (ままごと遊びの際) 遊びが広がるような言葉がけをしているか

		遊びが広がるような言葉がけをしているか					合計
		そう思う	少し思う	どちらともいえない	あまり思わない	思わない	
保育歴	A	8 (36.4%)	13 (59.1%)	1 (4.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	22 (100%)
	B	18 (52.9%)	10 (29.4%)	4 (11.8%)	2 (5.9%)	0 (0.0%)	34 (100%)
	C	12 (66.7%)	6 (33.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	18 (100%)
	D	20 (58.8%)	14 (41.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	34 (100%)
合計		58 (53.7%)	43 (39.8%)	5 (4.6%)	2 (1.9%)	0 (0.0%)	108 (100%)

表6 (ままごと遊びの際) 一人で遊んでいる子に対して関わっているか

		一人で遊んでいる子に対して関わっているか					合計
		そう思う	少し思う	どちらともいえない	あまり思わない	思わない	
保育歴	A	14 (63.6%)	8 (36.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	22 (100%)
	B	18 (53.0%)	13 (38.2%)	1 (2.9%)	2 (5.9%)	0 (0.0%)	34 (100%)
	C	12 (66.6%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	18 (100%)
	D	17 (50.0%)	9 (26.5%)	8 (23.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	34 (100%)
合計		61 (56.5%)	33 (30.6%)	12 (11.0%)	2 (1.9%)	0 (0.0%)	108 (100%)

群とも14.7%とある。ままごと遊びをしている最中、保育者は子どもから話しかけられやすい雰囲気を意識しているということが分かったが、自分が意識していることと実際どうなのかという客観的な視点で考えた時、不明確な部分もあるのではないかと考えられる。

表5「ままごと遊びの際、遊びが広がるような言葉がけをしているか」という質問項目からは、特にA群では、「少し思う」が最も高く13人(59.1%)であった。次いで「そう思う」が8人(36.4%)、「どちらともいえない」が1人(4.5%)という結果であった。経験年数の浅い保育者にとって遊びの広がるような言葉がけは、少々難しいことであることが分かる。

B群・C群・D群では、どの年齢別のグラフも「そう思う」が最も高く、B群18人(52.9%)、C群12人(66.7%)、D群20人(58.8%)であった。10年目以上のC群、D群は、「そう思う」(C 66.7% D 58.8%)、「少し思う」(C 33.3%、D 41.2%)という回答のみであったことから、言葉がけに対しての意識の高さがうかがえる結果となった。これに対してA群、B群では「どちらともいえない」「あまり思わない」という回答が見られた。遊びが広がるような言葉かけをしていくことは、9年目未満の保育者にとっては、少々困難なことであることが予想された。

表6「ままごと遊びの際、一人で遊んでいる子に対して関わっているか」という質問項目から、最も回答数が多かったのは、どの年齢別でも「そう思う」で56.5%であった。B群では、「少し思う」38.2%という回答も多

く出ていた。またD群は、「どちらともいえない」との回答が23.5%と、経験年数別では、最も高い回答率であった。ここから、15年以上の経験を重ねている保育者は、一人で遊んでいる子どもに対して関わる意識が他の年齢の保育者に比べて低いことが考えられる。逆にA群では、「どちらともいえない」「あまり思わない」という回答が全くなかったことから、一人でままごと遊びをしている子どもに対して関わりようとする意識が高いことが分かった。しかし、経験豊富な保育者にとって子どもの遊びに介入するという配慮だけでなく、あえて見守る配慮を選ぶ場面は多くあるのではないかと予想することができる。目の前の子どもが遊んでいる場面で、子どもの遊びの世界に直接的に介入するのではなく、側で見守るというも間接的な介入をしているということも予想される。そういったことを踏まえると、アンケート結果の人数が高いことが必ずしも子どもにとって良いかわりであるということは言いがたく、その場面に応じて判断することが必要ではないかと考えた。

(ままごと遊びの特徴)

表1～6では、ままごと遊びの際の保育者の意識についての質問を行った。どの質問項目の回答からも子どもに対して何らかの意識を心がけて関わっているというような意見が見られた。ここからままごと遊びは、保育者から働きかけをしやすい遊びであり、子どもへもアプローチを自然な形でできる遊びでもあることが経験年数に関わらず共通の結果として予想された。

しかし、表5「(ままごと遊びの際)遊びが広がるような言葉がけをしている」と、表6「(ままごと遊びで)一人で遊んでいる子に対して関わっている」では経験年数での違いが見えてきた。表5「(ままごと遊びの際)遊びが広がるような言葉がけをしている」では、全体で見ると「そう思う」53.7%、「少し思う」39.8%で合計93.5%と答え、「どちらともいえない」4.6%であった。「あまり思わない」は1.9%とあり、その内で回答したのは5～9年という経験年数の群のみであった。さらに表6「(ままごと遊びで)一人で遊んでいる子に対して関わっている」でも「そう思う」56.5%、「少し思う」30.6%で合計87.1%と答え、「どちらともいえない」11.0%であった。「あまり思わない」1.9%は、前述した表5と同様、5～9年の経験年数の群のみでの回答となった。ここからままごと遊びへの遊びの広がりをもつ言葉がけ、さらに一人で遊んでいる子に対しての関わりについて、経験年数別で個人差があると考えられる結果となった。

最後に表3「(ままごと遊びの際)ねらいをもった保育をしている」という項目では、ままごと遊びでの質問項目の中で唯一「思わない」という回答がでた。全体をみると、「そう思う」39.8%、「少し思う」35.2%、合計で

75.0%であった。半数以上の回答率ではあるものの、全質問項目の中では、「そう思う」「少し思う」という回答率の割合も一番低くなっている。これに対して「思わない」0.9%、「あまり思わない」7.4%、合計で8.3%の回答がどの経験年数別で見ても出てきたことから、他の質問項目と比べた際、ままごと遊びにおいてねらいをもって保育する意識が低いことがわかった。もちろんこの結果がままごと遊びのすべての心がけや働きかけを総じて述べている結果ではない。しかし、少なくともままごと遊びは保育者が子どもに対して関わりを持ちやすい遊びであることが概ねわかった。

②アンケート結果（自由記述）

以下、ままごと遊びに対して心がけている関わりについて自由記述で保育者に回答してもらい、キーワード別に整理した結果、30回答を得た。「ままごと遊びにおいて心がけている関わりは何ですか」の自由記述回答をKJ法を用いてカテゴリーに分類し、表7に示す。

表7のままごと遊びで心がけている保育者の関わりにおいて、保育者発の関わりについて＝a、子ども発の関わりについて＝b、双方向の関わりについて＝cと分けると、結果、a＝17、b＝5、c＝8とままごと遊

表7 ままごと遊びにおいて心がけている関わりについて

ままごと遊びで心がけている関わりについて							
カテゴリー※	回答	1～4年	5～9年	10～14年	15年以上	合計	コード
a	① 子ども同士のやりとりを見守る	0	0	2	7	5.5% (9)	a-①
	② 玩具の取り扱いや投げたりしないよう、喧嘩にならないよう見守る	2	1	1	0	2.5% (4)	a-②
	③ 一人遊びをしている子は、遊び方を見守る	1	0	0	3	2.5% (4)	a-③
	④ 平等に玩具が使えるよう見守る	1	0	0	0	0.6% (1)	a-④
	⑤ 集中して遊び込めるように見守る	0	2	3	0	3.1% (5)	a-⑤
	⑥ 相手の気持ちに気付けるような言葉がけをする	0	0	0	1	0.6% (1)	a-⑥
	⑦ 子どもの困った場面で言葉掛けをする	0	2	1	0	1.8% (3)	a-⑦
	⑧ 一人ひとりが役割を持てるような配慮を行う	0	0	0	2	1.2% (2)	a-⑧
	⑨ 次の遊びにつながるように言葉掛けをする	1	0	1	0	1.2% (2)	a-⑨
	⑩ 友達と関わりをもって遊べるように言葉掛けをする	1	8	3	1	8.0% (13)	a-⑩
	⑪ 日常生活での言葉を多く取り入れていく	1	0	0	0	0.6% (1)	a-⑪
	⑫ 食材などの名前を言葉で伝える	1	1	1	1	2.5% (4)	a-⑫
	⑬ 道具の使い方・役割を正しく使えるように見せたり言葉掛けをする	3	2	0	0	3.1% (5)	a-⑬
	⑭ 遊び方に変化をつける	0	1	0	0	0.6% (1)	a-⑭
	⑮ 友達と関わりをもって遊べるように仲立ちに入る	1	0	3	2	3.7% (6)	a-⑮
	⑯ 保育士が手本を見せるようにする	1	0	0	1	1.2% (2)	a-⑯
	⑰ 遊びの想像・発想を共有し、広げたり意欲がもてるような言葉掛けをする	0	3	1	2	3.7% (6)	a-⑰

ままごと遊びで心がけている関わりについて							
カテゴリー※	回答	1～4年	5～9年	10～14年	15年以上	合計	コード
b	① 子どもの疑問に柔軟に答える	0	1	0	3	2.5% (4)	b-①
	② 子どものイメージを否定しない	1	0	0	0	0.6% (1)	b-②
	③ 子どもの思いや伝えたいことを代弁する	2	3	0	1	3.7% (6)	b-③
	④ 遊びを通して子どもの成長を見ていく	0	0	0	1	0.6% (1)	b-④
	⑤ 子どもがイメージしているものを理解・共感する	1	1	3	1	3.7% (6)	b-⑤
c	① 子どもに合わせた応答的なやりとりをする	0	0	0	5	3.1% (5)	c-①
	② 保育士も遊びに入り込む	0	2	1	5	4.9% (8)	c-②
	③ 言葉でのやりとりを増やし、発達を促す	1	2	5	6	8.6% (14)	c-③
	④ 日常生活の延長線上になるような遊びの展開	0	0	2	2	2.5% (4)	c-④
	⑤ 役に入り込めるような関わりをする	0	2	0	0	1.2% (2)	c-⑤
	⑥ 子どもの成長につながるような関わりをする	0	0	0	1	0.6% (1)	c-⑥
	⑦ 遊びの展開が広がるように配慮する	2	5	0	4	6.7% (11)	c-⑦
	⑧ 貸し借りの仲立ちをする	0	2	0	2	2.5% (4)	c-⑧

※カテゴリー：保育者発＝a、子ども発＝b、双方向＝c（保育士からの関わりをa、子どもからの関わりをb、双方からの関わりをcとして分けた。）（筆者作成）

びにおいては圧倒的に保育者発の関わりが多いことがわかった。しかし、ついでは双方向の関わりの意見も多く、ままごと遊びにおいて保育者からの関わりの意識が強くもたれていることが示された。さらに特に意見として多いもの上位三位を示すと、

- 第1位「言葉でのやりとりを増やし、発達を促す（c-③）」
 第2位「友だちとの関わりをもって遊べるように言葉掛けをする（a-⑩）」
 第3位「遊びの展開が広がるように配慮する（c-⑦）」

となり、1・3位は双方向での関わりが上位を占めたことが特徴的な結果となり、2位のみが保育者発の関わりとなった。もちろん双方向の関わりがあれば、応答的なやりとりができていると考えるには、限界がありその場の雰囲気や保育者の意図・子どもの気持ち等、様々な要因を含めて検討する必要がある。しかし、少なくとも保育者が一方的・子どもが一方的に関わるということよりも互いに関わり合うことを心がけていることが予想された。

さらに経験年数別で見ると、最も意見の多かった「言葉でのやりとりを増やし、発達を促す（c-③）」という意見では、15年以上保育者が6人と半数以上を占め、逆に1～4年目はわずか1人という結果となった。発達を見通した上で言葉のやりとりを行っていくことは、経験年数の浅い保育者にとっては意識しづらい現

状があることがわかった。唯一、保育者発信での回答となった「友達と関わりをもって遊べるように言葉掛けをする（a-⑩）」では、全体の13人中、5～9年目が最も多く8人、そして10～14年目でも3人といわゆる中堅の保育者が多く回答していることが分かった。逆に若手保育者・ベテラン保育者はそれぞれ1名ずつと、あまり回答はなかった。中堅の保育者にとっては意識の向きやすい項目であることが予想された。

第3位「遊びの展開が広がるように配慮する（c-⑦）」は、双方向発信の項目であるが、10～14年目の保育者は回答数が0であった。1～4年目でも2人の回答数があったことに対して、遊びの展開についての見通しや配慮が実際に意識をしていないわけではない。10～14年目の保育者のこの結果はどういった意味をもつのか、疑問の残る結果となった。

経験年数別での1位のみをあげると、1～4年目は、「道具の使い方・役割を正しく使えるように見せたり言葉を掛ける（a-⑬）」。5～9年目は、「友達と関わりをもって遊べるように言葉掛けをする（a-⑩）」。10～14年目は、「言葉でのやりとりを増やし、発達を促す（c-③）」。15年目は、「子ども同士のやりとりを見守る（a-①）」となり、同じ回答数が上位に上がることはなかった。それぞれの経験年数によって、子どもに対する見方や意識している点も変わることが見えたが、そういった思いが実際の現場ではどのようにして現れるのだろうか。予備調査②では、子どもへの関わり方や働きかけ方を含めて一例ではあるが見ていきたい。

2. 予備調査②（ままごと遊びにおける事例研究）

（1）調査対象者

調査対象A保育園の保育者に研究の趣旨と倫理的配慮などについて口頭で説明をして承諾を得、クラスの保護者へ文面にて説明をし、承諾を得る。

対象：A保育園2歳児クラス18名（1、2歳混合クラス）保育士：3名 を取り上げる。（対象保育者は、2年目のA保育者と7年目のB保育者、対象児は、2歳児クラスにおける1歳4ヶ月から2歳1ヶ月の子どもを対象としている。）

（2）調査期間

2018年5月～9月

（3）調査目的

アンケートの中で、ままごと遊びの場面での関わりにおいて保育者がどのような意識をもって子どもと関わっているかが示された。しかし、実際の現場において保育者は子どもの思いや言葉にどのように反応し、応答性をもって関わっているかについては明らかになっていない。

そこで、自由遊び時間のままごと遊び場面において保育者と子どもとの関わりについて調査する。

（4）方法

観察記録は、午後、おやつ後に行われたままごと遊びを集中して行う。記録方法については、行動描写法⁹⁾を基軸とする。ただし、保育者がままごと遊びに誘い、誘導することで遊びを生起させている。その後は連続的な観察で行動のすべてを、経過の順序そのままに、系列的な自由記述で、時間の流れと場面の状況を合わせて記録する。

記録した内容を前章で作成した関わりの分類表を元にカテゴリーで分け、実態との共通点・相違点について明らかにし、考察する。

（5）倫理的配慮

調査対象児に対しては、クラスの保護者へ文面にて説明をし、インフォームド・コンセントを目的とした説明文を冒頭に入れ、調査協力に対する同意を得ることを必須とした。ビデオ調査への協力については任意であること、研究の目的以外に調査データを使用しないことなどを前提として、調査協力を依頼することで、倫理的な配慮を行った。

（6）仮説

保育者の応答的な関わりについて、アンケート調査か

らは見られなかった。この事例研究では、2歳児クラス（1、2歳児混合クラス）を対象に調査を行ったが、この時期（3歳未満児）は個人差や月齢の違いによる発達差が大きいと考えられる。発達の変化を十分にとらえる意味でもその応答性について明らかにする必要があると考えた。子どもが遊んでいる際のサインに対して、そばにいる保育者がいかに同じ気持ち（楽しさや面白さ）をとらえ、共有できるかという点を考察する。保育者・子どもからのやりとりを矢印で示し、その意味合いを筆者が読み取りを行う。その回数を通して、一つの応答性として捉えることとする。保育者が子どもの状況に応じてどのように言葉や身振り・手振りなどの反応を通して応えようとしているか、保育者発信の遊びの展開と子ども発信の遊びの展開で子どもの気持ちや行動の違いはあるのかを現場のエピソード記録を基に関わり方について考察していく。

（7）事例 ままごと遊びの事例と考察

事例7-1 応答性が見られた事例（2年目 A保育者）

2018年8月11日

男児Gくん（1歳6ヶ月）、ままごとで料理を作ってA保育者に食べさせている場面である。遊びの中で言葉のやり取りを楽しみ、子どもへ物の名前を伝えていく。

表8からは、保育者発の関わりaは4回、子ども発の関わりbは1回と明らかに保育者発のやりとりが多く見られた。子どもの言葉に対して保育者が言葉を受け止め、返答していることから子どもとの応答性が見られる事例であったと推測される。またその際の視線の交わり方や子どもの表情を観察することができ短いやり取りの中にも「言葉でのやりとりを増やし、発達を促す」という双方向の関わりが2回見られた。やり取りの中でもその際の子どもと保育者が心通わせ合っていることが予想された。ここでは、a-⑱「遊びの想像・発想を共有し、広げたり意欲が持てるような言葉がけをする」とb-⑤「子どもがイメージしているものを理解・共感する」というような子どもの意図を汲み取ろうとする姿が見られたのである。応答性が見えたと予想される場面では、子どもの信号に対して保育者が敏感に反応し、その後のやりとりによって、相互性が生み出されているのではないだろうか。その結果、応答性が見られることが予想された。

表8 応答性が見えたと予想される事例（2年目 A保育者）

保育士の言葉がけ・行動	子どもの反応・言葉・心情	コード
「これはなんですか？」	G：皿をA保育士にもっていき、「はい」	a-⑮
「まんま？ありがとうございます。スプーンで食べる？」	G：「まんま」	b-⑤
「スプーンちょうだい、スプーンください」（手を出す）	G：頷く	a-⑮
「ありがとう、ふふふ。これスプーンじゃない」	G：再度探しにいく	c-③
「スプーンスプーン。（現物を見せて）これと同じ形よ」	G：「はい」	a-⑫
	G：「？」	c-③
	G：再度探しにいき、手渡す	a-⑬

事例7-2 応答性が見えないと予想される事例（2年目 A保育者）

2018年5月2日

女児R（1歳7ヶ月）が欲しい玩具を探している際、A保育者もその思いを受け止め、一緒に玩具を探そうと関わっている場面である。他児との仲立ちをしてトラブルなく玩具を借りるが、Rと保育者とのやりとりに対して応答性があまり見られない。

表9では、保育者発の関わりaは7回、子ども発の関わりbは、4回であった。双方向の関わりcが見られたのはわずか1回のみである。子どもが困った場面に対して、保育者がどのように関わればいいのか試行錯誤している様子が伺えた。子どもの思いを受け取ることに意識がいったことが映像から推測される。その結果、関わりの頻度が多く、またやりとりのスピードも子どもに合わせたものではなく、速くなっている。保育者が子どもの返答を待ってあげることが難しく、先に答えを言いがちになってしまっていることが読み取れた。ここから、どちらが関わりを発信するということが重要なのではなく、中島が述べた通り「関わりの最中にどのような内容で、適切な間をとりながら対応する」という保育者の関わり

の重要性が見られた。

2年目ということに限らず、このような傾向は見られるのではないかと予想される。7年目のB保育者の事例は以下の通りである。

事例7-3 応答性が見えたと予想される事例（7年目 B保育者）

2018年8月9日

男児I（1歳6ヶ月）、K（1歳10ヶ月）とのままと遊び時。子どもと保育者とのやり取りの中で、他の子も巻き込んでさらに遊びを広げていこうとする保育者の関わりが出てくる場面。

表10から保育者発の関わりaは5回、子ども発の関わりbは4回、双方向の関わりcは3回とそれぞれが万遍なく見られたが、a-⑩「友達との関わりをもって遊べるように言葉掛けをする」の項目、またc-⑦「遊びの展開が広がるように配慮する」の項目が事例から読み取れた。応答性が見えたと考えられる前提として、保育者と子どもの間での同じ場面の共有ができており、イメージが出来ていることが推測された。そこで生まれるやり取りには2者間での遊びの楽しさが一致していたよ

表9 応答性が見えないと予想される事例（2年目 A保育者）

保育士の言葉がけ・行動	子どもの反応・言葉・心情	コード
「パン？どこにあるかな？」 (周りを見回し、Cちゃんが持っているのを見つける)	R「パン欲しい…」	a-⑦
「Cちゃん、Rちゃんにパンかしたって。パンさがしてるねんて。」	R：自分ひとりで周りを見て探し歩く (Cちゃんは嫌なようでその場から逃げる)	c-⑧ a-⑥ b-③
(Mちゃんが持っているのを見つける) 「Mちゃん、Rちゃんがパンかして欲しいねんて。」	R：どうしてもパンの玩具が見当たらず、A保育者に手を引っ張られて探し続ける	a-⑥ b-③
「パンと・・・」と言いかけて、そのまま様子をみる	M：卵をRへ貸してあげる ↓ R：納得いかないようで、Mが持っていたかごの中を探し出し、食パンをみつける	a-① b-④
「ここにおいてお弁当作る？」(キッチンで作るように提案する)	頷き、皿に借りたものをどんどんとのせていく	a-⑪
「おにぎりも乗せる？おいしそう」 「いっぱいのったね～」	「…」	a-⑪
「いっしょやな～できた？」	R：Mの持っていたパンと同じことを見つけて、「いっしょ」という 頷く	a-⑪ b-⑤

表10 応答性が見えたと予想される事例 (7年目 B保育者)

保育士の言葉がけ・行動	子どもの反応・言葉・心情	コード
「はい、もう1個あったよ」 (コップをテーブルの上へ置く)	I : (コップを探している I くん)	b - ③
	I : (テーブルに座る)	a - ⑨⑭
「先生もいれて。ほなかんぱいしよ。かんぱーい。」	I : (B保育者とうれしそうに乾杯する)	a - ⑩
「Kくんはする? かんぱい」	K : (コップに牛乳を注ぐふりをする)	c - ① b - ⑤
「Kくん、じゃあ牛乳入れてくれる? ちょうだい」 (他児が気になり、Kの行為を見ていない)	K : (周りのカップへ牛乳を注ぐ)	
	K : I のコップへ注ごうとする	a - ⑥⑩ ⑮ c - ⑦
「あ、ありがとう入れてくれるの? I くん入れてくれるってー」 	I : Kにコップを差し出し入れてもらう	
「せーの、かんぱーい」(飲む振りをする)		a - ⑪ b - ⑤
	K : 「ばーい」	
	K : 「ごくごくごく」(B保育者を見ている) 飲み干すとまた自分のコップへ注ぐ	b - ②⑤ c - ⑦
(牛乳のコップをテーブルに置くとすぐにKくん・I くんが牛乳を注いでくれる)「はあ〜もう(コップに) いっぱいやわ。一回飲んでもいい?」 (飲む振りをした後)「次りんごジュース飲みたいな」 	I : 「いーよ」 I くん・K くん、リンゴのパックを探しに行く	a - ⑭

うに感じた。その中で行われる相互の会話は自然に行われ、遊びの流れを感じるものであった。また、2年目のA保育者は、表7の自由記述欄の傾向と比較したときに個人差が見られたが、7年目のB保育者と中堅保育者が回答した自由記述での関わりの一覧を比較すると、同じ心がけをして保育していることが読み取れた。偶然的なものともいえるが、今後事例数を増やし検討を重ねていきたい。

事例7-4 応答性が見られないと予想される事例 (7年目 B保育者)

2018年5月30日

男児K（1歳3ヶ月）とのもまごと遊び時。Kとの関わりを意識しているが、なかなか思うような応答が見られないことから、最後は違う場所へいって一人で遊びにになってしまう。

表11 応答性が見られないと予想される事例（7年目 B保育者）

保育士の言葉がけ・行動	子どもの反応・言葉・心情	コード
お皿をKに差し出して「どうぞー乗せてください」		
	K:「はい、こっちからのせまーす」	
「これ、なんですか？」		a-⑨⑰
	K:「ぶろっこりーです」	b-⑤
「そうなの？」		
(テーブルにたくさんの食べ物が並べられているのを見て他児に向かって)「どれから食べようかな？これはおてて使っているの？」		a-⑬⑰
(反応がなかったためそのまま手で食べる)「いったっきまーす」	他児に伝える ※K:少しはなれたところから「フォーク…」探す	a-⑰
	G:口をあける	
Gと一緒に口をあけて「あーむ」		b-②⑤
	K:「あーフォーク…」	a-⑧⑨⑭
「フォーク？持ってないねん。持ってきてくれる？」		
	K:「はい」(スプーンを差し出す)	c-①③⑤
(スプーンを受け取るが、フォークではなかったので、再度他児に声かける)「もってきて～フォーク。店員さん」		a-⑰
	K:「…」	
「K君の分、大丈夫？」	K:別の場所へ遊びに行く	

表11の7年目・B保育者のエピソードでは、保育者発の関わりaは5回、子ども発の関わりbは2回、双方向の関わりcは1回と、回数のみを見ていくと保育者発の関わりが多いものの、特徴として一度の言葉がけから、複数のコードを読み取ることができた。これは2年目・A保育者からの働きかけとは異なった点であった。子どもの1つの信号に対する意味づけ・読み取りがより幅広く行われている結果、その配慮・対応が多く見られたのではないかと考えられる。一見、やりとりのみを観察していると、表10と同様、イメージの共有の元で子どもと保育者が遊んでいるように見えるだろう。しかし、最終的に子どもがB保育者の元を去っていく場面に関してみていくと、やりとりの最中にB保育者の子どものサインに対する読み取りはあっても、それが子どもとの思いとは違っていたことが推測される。子どもとの相互性という点では、差異が生まれていたのではないだろうか。その結果、子どもの楽しさの共有まで行かず、別の場所へ移動したと予想された。

(8) 2人の保育者のままごと遊びにおける関わりについての考察

A保育者とB保育者の上位3位までを順位別で項目を対比したものを表12にまとめた。

表12から第1位の「子どもがイメージしているものを理解・共感する」は、共通して両保育者に見られる項目であった。特に2年目A保育者は、ままごと遊びの中でも約2割に迫る割合で見られた関わりの1つであった。この結果から、子どもの思いを考えて展開していくことは経験年数を問わず、実際の保育の中でも行動や言動において意識していると考えられる。また事例研究の中でもその関わりがままごと遊びの随所で見られる結果

となった。

2年目A保育者は同率1位で「遊びの想像・発想を共有し広げたり意欲がもてるような言葉掛け」が見られたが、これは7年目のB保育者も2位であげられる項目となった。子どもが主体的に遊びを展開している際、保育者がどのような関わりをするかで、その後の遊びが発展するかどうかは左右される1つの要因にもなる。その際、言葉がけという働きかけに対しての意識が、両者ともに強くあり、特に意識をしていることだと読み取ることができた。事例の結果からも子どものままごと遊びを支えていく過程で保育者の言葉がけは多く見られたが、言葉の内容だけではなく、タイミングや語りかけた保育者の表情・しぐさや目には見えない思いによってその後の子どもの遊びは大きく変わることが考えられた。応答性が見られた事例では、矢印のやりとりを分析する中で、保育者が子どもの状況に応じて何らかの反応を通して応えようとしている姿がみられた。その保育者の関わりと子どもの思いとが上手く調和した際、応答性を感じる場面といえるのではないかと考えた。しかし、関わりを多くもつことだけが重要なのではなく、子どもの瞬間の遊びをどう理解し、支えるかという子ども理解の深度という下支えがあってこそ、遊びの応答性が定義できるのではないかと考えた。

3. 今後の課題

ままごと遊びの実際の場面では、言葉がけという関わりに対する意識が、両者ともに強くあると読み取れた。これはアンケート調査での結果と同じ意識であったことが分かった。事例の結果からも子どものままごと遊びを支えていく過程で保育者の言葉がけは多く見られた。ままごと遊びというイメージを共有する過程の場面では、

表12 ままごと遊びの事例におけるA保育者とB保育者の関わりの対比

順位	保育者	項目	% (回数)
1	A保育者	遊びの想像・発想を共有し、広げたり意欲がもてるような言葉掛けをする (a-⑭)	18.4% (7)
		子どもがイメージしているものを理解・共感する (b-⑤)	18.4% (7)
	B保育者	子どもがイメージしているものを理解・共感する (b-⑤)	16.1% (5)
2	A保育者	子どものイメージを否定しない (b-②)	10.5% (4)
		子どもの思いや伝えたいことを代弁する (b-③)	10.5% (4)
	B保育者	遊びの想像・発想を共有し、広げたり意欲がもてるような言葉掛けをする (a-⑭)	12.9% (4)
3	A保育者	相手の気持ちに気付けるような言葉がけをする (a-⑥)	5.2% (2)
		子どもに合わせた応答的なやりとりをする (c-①)	5.2% (2)
	B保育者	言葉でのやりとりを増やし、発達を促す (c-③)	5.2% (2)
		次の遊びにつながるように言葉掛けをする (a-⑨)	9.6% (3)

※斜体の項目は、両保育者の同一回答のものとする。

特に保育者からの関わりがたくさんみられ、一緒に何かを作る際に共通の認識、共通のイメージをもてるような関わりが意図的に行われているのではないかと推測された。子どもがイメージしやすいよう、保育者が働きかけをする、言葉がけるということが今回の事例の中でも見られる場面はあった。しかし、それだけではなく子どもの見ているもの・感じていることを同じ目線で保育者が見ていくことも重要であると考えた。それは、子どもの瞬間の遊びをどう理解し、支えるかという点こそが乳児の遊びで重視されるべきではないかということである。そういったことを考えた際、一人の保育者の意識だけでは子どもの遊びを支えきることができない現状もあるだろう。例えば乳児の保育は複数担任でクラスをもつ。生活場面も遊びの場面も、保育者間の関わりが共有されているのか、同僚性が求められる。では、保育者によって関わり方が違うということは子どもにとってどういう影響があるのだろうか。また子どもの遊びを支えていく際に子どもの遊びの理解・そして保育者同士の協働性やクラスとしてのチームワークは必要不可欠になってくる。乳児保育では、様々な面から今後も研究を深めていく必要性をさらに感じた。

今回の事例研究は、すべての保育者が子どもに対してどのように関わっているか総じて述べているわけではない。1つの園のクラスで保育する新人A保育者と中堅B保育者という2名の事例を基に行った一例である。そのため、事例数もまだまだ少なく、仮説の検証についてもそれぞれの保育者の傾向としては分析できたが、新人保育者、ベテラン保育者の全般を示すものではない。本研究を基とし、事例についても分析を重ねること、さらに年齢別でも検証を重ねること、今回は言葉でのやり取りを基に分析を行い、応答性のある保育の一考察を行ったが、より深く関わり方の考察を行うことが必要であると考え。また、今回の研究の中で遊びに対してのさらなる理解を深め、遊びによって関わりが変化するのかについても今後の課題である。次への研究課題としていきたい。

注

- 1) 厚生労働省(2018) 保育所保育指針解説 p.121
- 2) ままごと遊びの「ままごと」について、善本(2016)は「本来は食事や台所仕事を中心とした生活全般について、大人の真似をする遊びのこと」とし、子どもが日常生活の中で経験したことの蓄積から模倣や見立て遊び、役割実現を生活の再現の中で表現する遊びであり、まさに多様な体験をしていくこの時期に最適の遊びである。他者とイメージを共有するだけでなく、遊びを通して他者の存在を気付いていく際の重要な体験であることから自由遊びの中でも

比較的どの保育現場でも行われているものと考え、選択した。

- 3) 野澤祥子、淀川裕美、高橋翠、遠藤利彦、秋田喜代美(2016)「乳児保育の質に関する研究の動向と展望」東京大学大学院教育学研究科紀要第56巻 pp.414-416
- 4) 片平朋世、村中李衣(2016) ノートルダム清心女子大学紀要, 40, 81-96
- 5) 玉置哲淳、水野晴奈(2010)「実況」する関わりから見る保育者の指導のあり方の検討～ごっこ遊びにおける保育者の関わりについて～ エデュケア 31, 29-41
- 6) 本研究でのままごと遊びの位置づけについて
日本文化いろは事典 (http://iroha-japan.net/iroha/B04_play/16_mamagoto.html) より
「飯事(playing house) …ままごととは、子どもが調理の真似事をして遊ぶことで、日常での生活全般を真似た遊びも含まれます。(中略) ままごとの『まま』は幼児語で『飯(めし)』のことを指し、『ごと』は古い日本語で『コト』、つまり祭りなどの行事を指します。この事から、様々な行事に炊事役として少女が参加したのが、後になって次第に遊びへと変化したと考えられます。子ども達はままごとを通して食卓での作法や言葉使いだけでなく、招客、交際、贈答などを遊びから身に着けることができます。」とある。
ごっこ遊びの中でも食べ物と見立てで作る、振る舞う、食べる、祝う等があげられるのではないかと考えられた。ここではこういったことを踏まえて「ままごと遊び」と総称する。
- 7) 玉置哲淳(2008)「指導計画の考え方とその編成方法」(株)北大路書房 pp.26-29
玉置は、内的活動について「外から見えている姿のみならず、活動している子どもの見えていない心の動きや思いを理解し、着目していくことが指導計画を考えていく保育者にとって重要」と述べている。さらに「子どもの活動には、外的活動と内的活動(内的操作、関係のイメージ、自己のイメージ)の2つの側面から理解することが重要である」と捉えている。
- 8) 長谷川万祐・古川聡(2007)「ままごと遊びの意義と役割の発展過程」日本教育心理学会総会発表論文集 49(0), 304
- 9) 小林芳郎(1976) 自然観察の理論と方法 藤永保・高野清純(編) 幼児理解の方法 日本文化科学社 p.82

文献

1. 片平朋世、村中李衣(2016) ノートルダム清心女子大学紀要, 40, pp.81-96
2. 小林芳郎(1976) 自然観察の理論と方法 藤永保・高野清純(編) 幼児理解の方法 日本文化科学社 p.82
3. 玉置哲淳(2008)「指導計画の考え方とその編成方法」(株)北大路書房 pp.26-29
4. 玉置哲淳、水野晴奈(2010)「実況」する関わりから見る保育者の指導のあり方の検討～ごっこ遊びにおける保育者の関わりについて～ エデュケア 31, pp.29-41
5. 中島紀子(2004)乳児期における自己の「意味づけ」と保育者の応答的関わり 聖カタリナ大学人間文化研究所紀要, 第9号, pp.63-69

6. 日本文化いろは事典 (http://iroha-japan.net/iroha/B04_play/16_mamagoto.html) 令和元年8月20日
7. 長谷川万祐・古川聡(2007). ままごと遊びの意義と役割の発展過程 日本教育心理学会総会発表論文集 49(0), 304

謝辞

本稿の作成にあたり、ご指導下さった大阪総合保育大学大学院 大方学長に心より感謝いたします。また観察記録を承諾頂いた園の理事長・園長を始め、全保育者・保護者・園児の皆様に深く感謝致します。

A Study on the Responsive Relationship of Nursery Teachers in the Playing Setting of a 2-year-old Class

Tomoko Tamagawa

Chihaya Akasaka Welfare Association Uehonmachi Genki Gakuen

In this study, the relationship between children and nursery teachers shall be discussed through observation of the practice of childcare in the two-year-old class. Research has been conducted on how children interact with children and how they should be, but there is little research on infancy. In addition, although the meaning and the role of the play are done on the development, there are still few things through the practice. As stated in the Nursery School Guidelines revised in 2018, it is important to have a response to children in childcare. However, on the other hand, there is a problem that the balance of responsiveness is left to each nursery teacher. Even if it is said in one word that it is related to the child and the nursery teacher in response, it is hard to see, and the definition is not possible to lump it together. Especially, it is necessary for the child to be involved in the relation of the infancy while corresponding individually. It is necessary to consider that the child becomes the subject and play is developed though it is possible to say that it is a typical play in the garden life. In play, we examine how children's "now" and the "now" of the nursery teacher communicate with each other from the same point of view and resonate with each other in the same enjoyment. As a premise, the child understanding of each nursery teacher, the way of thinking of the child, and the working environment were strongly reflected, and the depth of the child understanding was considered in other words. In the nursery, we will explore how the nursery teachers perceive and engage in play.

Key words : 2-year-olds class, Playing house, Relationship of nursery teachers